

保 育

4歳児の人とかかわる力を育むための教師のかかわり

—ごっこ遊びを通して—

広 兼 睦

1 研究の目的と背景

森上史朗等(1997)は、「近年、子どもの数が減少し一人っ子が増えてきている。その為、核家族が多い現代社会において人間関係が重層化されず、子どもたちは親と子というシンプルな関係の中での生活を送っているのである。そのような環境の中、大人との関係においてはあまり問題がないのに、新しい場での子ども同士のかかわりや会話になると途端に緊張が増し、子どもが子どもを怖がる姿が見られるようになってきている。このように人間関係が漂白化されつつある社会的背景を憂え人間関係が衰退してきているのである¹⁾」と述べている。このような社会で生活していく上で、多様な人とかかわる力を身に着けるといことは重要であると考えます。

実際の本園の4歳児の4、5月頃の子どもの姿においても、友だちから身を守るためにわざと大声で暴言を吐いたり、逆に同年齢の友だちの前では躊躇してしまい思いを伝えることができなったりする子どもの姿が見られる。また子どもたちの遊びの様子の中では、特にごっこ遊びにおいては、子どもたち同士の思いが上手く伝えられず、遊びが盛り上がりせずに消滅してしまう姿がしばしば見られていた。

そこで本研究では、友だち同士のかかわりが生まれる遊びの中でも、特に他者という存在を感じていなければ成り立たない“ごっこ遊び”に着目した。ごっこ遊びを通して4歳児の人とかかわる力を育んでいくために必要な教師のかかわりとは何かを検討し、明らかにすることを目的とする。

2 4歳児の人とかかわる力の基礎とは

4歳児は、友だちと一緒に遊んだりぶつかり合ったりする中で、自分の思いを言葉や態度で伝えたり、相手の思いに気づいたりしていくのである。さらに、それを繰り返していくことで、次第に自分と他者との違いに気づき、自分の思いと相手の思いに折り合いをつけたりしていくのである。これらの経験は4歳児にとってとても大切であり、やがて大人になった時の人間関係を作っていく時に必要なコミュニケーション能力につながっていくのだと考える。

以上のことを踏まえて、本研究での4歳児の人とかかわる力の基礎が育まれている子どもの姿として、現段階では次のように捉えている。

- ・自分の思いを相手に伝える
- ・相手の思いに気づく
- ・相手の思いを受け入れる(折り合いをつける)

上記の3点の子どもの姿が、ごっこ遊びの中でどのように見られるかを検討し、4歳児の人とかかわる力を育んでいくためには、どのような教師のかかわりが必要かを明らかにしていきたいと考えている。

3 ごっこ遊びについて

片岡輝(1992)は、「ごっこ遊びは発達段階と関連があり、ごっこ遊びについては何かになることによって成り立っている為、遊んでいる子どもがその真似ができないと成立しない。また、真似るということは、そのモデルの行動を記憶して自分の脳の中でそれを呼び起こしながら、自分の行動と一致させる必要性がある²⁾」と述べている。

ごっこ遊びをすることによって、自分が真似をする対象との関係、さらにはその遊びに友だちが加わり他者との関係が入ってくる。自分なりのイメージをもちながら遊ぶことを楽しむ4歳児において、ごっこ遊びというのは、遊びの中でも特に人とかかわる力が育まれやすい遊びだと考える。

そこで、本研究では、ごっこ遊びの中での子どもの姿に焦点を当て、遊びの特性を生かしながら、それを通して4歳児の人とかかわる力を育むための教師のかかわりを検討することとした。

4 研究の方法

(1) 対象児

年中組4歳児20名(男児12名 女児8名)

(2) 観察期間・場面

平成26年7月～12月

好きな遊びをしている場面とまとまった活動をしている場面

(3) 方法

上記の場面の中のごっこ遊びに焦点を当て、子どもたちの人とかかわる力が育まれていると感じられるエピソードを記録する。そのエピソードを、子どもの姿と教師のかかわりを中心として分析を行い、4歳児の人とかかわる力を育むための教師のかかわりとして適切であったか、または効果的であったかを検討し、ごっこ遊びを通して4歳児の人とかかわる力を育むためのよりよい教師のかかわりとは何かを明らかにする。

5 実践事例

実践例1 おうちごっこ(7月)

<背景>

何かあるとすぐに手が出てしまうA男。日々の生活の中で、クラスの子どもたちも少しA男を怖がっている様子などがしばしばあった。そんなある日、室内でのおうちごっこを5、6人くらいでしている傍で、A男は赤ちゃんの真似をしながら周りをウロウロしている。子どもたちはA男に気づいている様子だが、声をかけようとはしなかった。

①「じゃあ、こっちの布団を使って!」

服を身に着け、お料理をしたり、お人形をあやしたりしながら、5、6人で楽しそうにお家ごっこをしている。その傍をA男は、赤ちゃんになりきりながら、はいはいをして行ったり来たりしている。教師は、その姿を見て「A男くんもお家ごっこに入れてもらったら?」とA男にだけ聞こえる声で話しかけるが、「いや、いいバブ!」と答え、A男は赤ちゃんの真似をし続け、周りを行ったり来たりしている。しばらくしてA男は、みんながおままごとに使っていた布団を持ち去っていく。B女は、「あー。もう。それ私たちが使ってたのに…」と小さくつぶやいたものの、それ以上は何も言わず遊びが続けられる。教師が、周りにいる子どもたちに聞こえるように「A男くん、その布団、みんなが使っていたのじゃないかな?」と尋ねるが、「バブー。バブー」と赤ちゃんの真似をするA男。「みんな楽しそうだね。何しているの?」と教師が尋ねると「今ね、お家ごっこしているの」とB女が答える。「いいね。ねえねえ、お母さん。ここに大きな赤ちゃんがいるよ。」と言うとA男は「バブ!」と言う。教師が「A男赤ちゃんもおうちごっこに入れてもらったら?」と尋ねると「入れてバブ!」とA男が言う。「みんなどう?」と教師が尋ねると「いいよー」とみんなが答える。A男も「バブ!」と返事をし、みんなの輪の中に

布団を持って入る。教師が布団のことについてA男に話しかけようとした時、B女が教師とA男の間に入り「じゃあ、Aくんは赤ちゃんね。私、お母さんだから。こっちの布団は赤ちゃんのじゃないから、赤ちゃんはこっちの布団を使って！いい？」と言う。すると「バブ！」とにっこり笑って嬉しそうにA男が答えた。

【考察】

A男は、本当はみんなと一緒にお家ごっこをしたいのだが、自分から「入れて」と声をかけることが出来ずにいるのだととらえた。その為、教師が全体に聞こえるように「ねえねえ、ここに大きな赤ちゃんがいるよ」と声をかけることで、A男が自分から「入れて」という思いを伝えやすいきっかけづくりになったのだと考える。

さらに、普段はA男に対して自分の思いを伝えるにくいB女だが、「赤ちゃんはこっちの布団を使って！」という姿から、お家ごっことして役になりきっているからこそA男に思いを伝えやすくなったのだと考える。



図1 布団を持っていこうとするA男



図2 その後のおままごとの様子

実践例2 たたかいごっこ（9月）

<背景>

男児数人と教師で、園庭で戦いごっこをしていた。突然、F男がしゃがみこみ泣き出した。F男に泣いている理由を聞いてみると「H男くんパンチされて痛かった」と答えた。しかし、H男は「やってない」と言い、みんなで考える事になった。

①「じゃあ、もっと力弱くして戦いしようや！」

「おれ、Cくんパンチしてないよ！」と驚いたようにD男が答える。「そっかー。Dくんはパンチしてないよって言ってるよ？Cくん」と教師がC男に尋ねると「ううん。DくんがCくんのおなかパンチした」と答える。「ねえねえDくん、Cくんのおなかパンチしたん？」とE男は、D男の顔をのぞき込みながら尋ねる。「んーん…」と困った様子のD男。「どうやって戦いごっこしたんかな？」と教師が尋ねると、「こんな感じ」とD男は答え、実演をする。「あー。ほんとおなかにあたったけんじゃない？」とE男が言う。「でも、強くはしてないよ！」とD男は強めの口調で答える。「そっかー。D男くんは、強くしないように気をつけて戦ってたんだね。ちゃんと考えてたんだよね。でも、Cくんは当たってどうだったかな？」と尋ねると「痛かったけ泣いた…」とD男が答える。「そーだよね、Cくんにとっては痛かったみたいだね。どうやって戦いごっこしたら痛くならないかな？」と教師が尋ねると、男児数人はしばらく考える。「じゃあ、Cくんには痛くならんように、もっと力弱くして戦いしようや！」E男が答える。「そーよね！そーしよ」と周りにいた子どもたちも賛同する。

「Cくん、ごめんね。戦いしよ」とD男くんが言う。「いいよ。する！」と言い、再び戦いごっこが始まった。教師は、何も言わずその様子を少し離れたところから見る。その後、友だちに当たらないようにたたかいごっこを楽しんでいる。

【考察】

D男にとっては、悪気はなく加減をして戦いごっこをしていたつもりだったが、C男にとってはそうではなかった。

教師が仲介役となり、双方の思いを、戦いごっこをして遊んでいた子どもたちと一緒に考えていくことで、自分と他者との受け取り方の違いに気づき、「Cくんには痛くならないように…」という思いが生まれるきっかけになったのだと考える。

女とG男のかかわりが生まれるきっかけとなった。

さらに、それをきっかけに周りにいた子どもたちも「教えて」とF女とG男の周りに集まり、みんなで手裏剣を教え合いながら作る姿へとつながった。

これは、“忍者ごっこをしたい！”という共通の思いをもつ子どもたちがいたからこそ、同じように手裏剣を作りたいという共通の思いをもてたため、友だち同士で教え合う姿が見られたのだと考える。

実践例3 にんじゃごっこ（11月）

<背景>

クラスの中で忍者ごっこがブームとなり、なりきるために必要な忍者の服や武器などを作る子どもたちが増えていた。また、忍者になりきって戦いごっこをしたり、お城を作ったりしていた。

①「手裏剣、教えて！」

「先生、これで手裏剣つくって！」とF女が教師に頼みにくる。「Fちゃん、作ってみてごらんよ。つくり方知っている？」と教師が尋ねると「やってみただけでできんのじゃもん」とF女が答える。「そっかー。なんかね、Gくんが手裏剣作れるって言ってたよ。Fちゃん、Gくんにつくり方聞いてみたら？」と教師が言う。「え？Gくん作れるん？聞いてみる！」と言い、G男のところへ向かう。「ねえねえ、手裏剣のつくり方教えて」とF女が言うと、「手裏剣？いいよ。」とG男が答え、一緒に手裏剣を作る。すると周りで作っていた友だちも「私も教えて」「ぼくも」などと数人が集まってくる。その後、G男はすごく嬉しそうな表情をし、数人の子ども同士で手裏剣を教え合いながら作る姿が見られる。

②「それ、いいね！」

数人の子どもたちが机を囲みながら、忍者ごっこに必要な服や武器などをそれぞれで作っている。そんな中、H男は1人で黙々とベルトやバンドなどを作っている。「いいじゃん！なんだか忍者っぽくなってきたね」と教師が言うとH男は「まだよ。忍者はここも（口の周り）隠れとるもん」と答える。「なるほどね。確かに、忍者ってここ（口の周り）隠れとるもんね」と教師が言うと、「ねえ先生、黒の画用紙ちょうだい」とH男は言い、画用紙を切って口の周りに軽く巻きつけてテープでとめる。「できた！！」とH男は叫び、嬉しそうに鏡があるところへ小走りで自分の顔を見に行く。教師も一緒についていき「おおー！！いいね！本物の忍者みたいじゃん！」と少し大きめの声で言う。すると傍で剣づくりをしていたI男が駆け寄ってきて「ねえねえ、それいいね。おれにも教えて」と言う。その後、H男とI男は互いに画用紙にテープを貼り合い、嬉しそうに鏡に傍までかける。

【考察】

H男が「まだよ。忍者はここも（口の周り）隠れとるもん」と答える姿が、自分のイメージしているものと自分の姿とでは、まだ忍者になりきれていないと比較をしている。より自分のイメージしているものに近づけようと一生懸命になっている姿から、こうなりたいという強い思い、またはイメージがもっていると考える。

【考察】

F女は、自分で手裏剣が作れず教師に尋ねてきたが、そこで教師が、F女と一緒に作るのではなく、G男に尋ねるように言葉がけすることで、F

そこにI男が「いいね」とH男を認める言葉がけをしている姿から、これも実践例3の①と同様に忍者ごっこという共通の思いをもっていることに付け加え、2人の忍者に対するイメージが似ている為、相手の工夫しているよさに気づき、自分もやりたいという思いをもったことから「それいいね。おれにも教えて」というかかわりが生まれたのだと考える。

③「じゃあ、ジャンケンにしよう！」

J女が「ねえねえ、これはあそこに運んで！」という「おっけー」とK女が答え、2人はお城づくりのために、大型積み木を運ぶ。しばらくすると積み木で作った大きな四角の枠ができる。「じゃあ、これがお城ってことね」とJ女がいうと「うん」とK女が答える。すると、そこへI男がやってきて積み木の上を歩く。「もう、そこ歩くんじゃないのに…ここお城なんよ」とJ女が言う。「でも、ここ道ができとるよ」とI男が答える。それを見ていたK女が「Kもやってみよう！」といい、I男の後ろをついて歩く。何も言わずその様子を見ていたJ女だが楽しそうだと感じたのか「じゃあ、Jちゃんはこっちからいーこお！」と言い、逆向きに積み木の上を歩き出す。J女とI男が向かい合ったところで、「あー！行き止まりになった！」とJ女が言う。「ジャンケンしよう」とI男が答える。「ジャンケンポン！」そう言ってじゃんけんをするとJ女が負けた。「じゃあ、Jちゃん降りるね。ジャンケンで負けた方がおりにしようや」とJ女が言う。それを聞いたI男とK女は「いいよー」と嬉しそうに答え、3人で新たな遊びが始まった。周りにいた子どもも楽しそうだと感じたのか「いーれーて」と新たに3人が加わる。「いーいーよ」とJ女、I男、K女の3人は答え、嬉しそうに自分たちで考えた遊びのルールを説明する。

その後は6人で楽しそうにジャンケンをしてまわって遊ぶ姿が見られる。

【考察】

大型積み木を使うことによって、ただ忍者になりきっていた遊びから、新たに自分たちで作りだした遊びへと変わっていったのだと考える。またこの時、簡単ではあるが自分たちで作ったルールを守りながら遊ぶことで、友だちと一緒にルールのある遊びをすることの楽しさを感じていたと考える。



図3 ジャンケンポン！

6 実践を終えて

実践を積み重ねる中で、ごっこ遊びを通して4歳児の人とかかわる力の基礎を育むために必要な教師のかかわりについて、次のようなことが大切だと考える。

①子ども同士をつなげる教師のかかわり

実践例1の①より、自分の思いをなかなか伝えることができない子どもに、教師が思いを伝えやすいきっかけをつくることで子ども同士のかかわりが生まれ、かかわりが広がったりした。また、思いを伝え、周りの友だちが「いいよ」と答えてくれることで、自分の気持ちを受け入れてもらえた喜びを感じていたと考える。

このように、自分で思いを伝えることができるような教師のかかわりは、人とかかわる力の基礎を育むために大切なかかわりだと考える。

② “なりきる”を支える教師のかかわり

実践例1より、B女は始めはつぶやくだけで自分の思いを伝えられなかったが、赤ちゃんというかわいい役になりきっているA男にだからこそ、役を通して自分の思いを伝えられたのだと考える。

このように、役になりきっているからこそ、その役の力を借りて思いを伝えられるきっかけになったのだと考える。また、子どもたちがその役になりきるためには、教師が子どもの世界観に入りながら、子どもたちに言葉がけをすることが大切だと考える。

③ 思いの仲介役としての教師のかかわり

実践例2より、双方の思いを教師が仲介することで、2人の思いの違いに気づくきっかけとなった。また、周りにいる友だちと一緒に考えていくことで、相手の思いを自分で考え、その考えを伝えようとする場面が生まれた。

こういったかかわりを繰り返していくことで、相手と自分との思いの違いに少しずつ気がついていくのだと考える。

このように、それぞれの思いの違いに気づくことができるようなそれぞれの思いを分かりやすい言葉で一つひとつ整理していく教師のかかわりは大切であると考えます。

④ イメージをつなげていくための教師のかかわり

実践例3の忍者ごっこは、6月頃から忍者についてクラスで取り組んできた。子どもの興味からクラス全体で積み上げていくことで、同じテーマのごっこ遊びやそのごっこ遊びのイメージを共有し合えるのだと考える。

このように、子どもたちそれぞれが近いイメージをもって遊ぶことが出来ることで、友だち同士のかかわりが増えたり、遊びが膨らんだりするのだと考える。このように、子どもたちがイメージをもちやすいように教師がかかわっていくことが、かかわりがうまれやすいきっかけとなり、大切であると考えます。

⑤ ごっこ遊びが広がる教師のかかわり

実践例3の③より、大型積み木という新たな素材を取り入れることで、遊びに広がりが出てきた。それにより、今までしていた忍者ごっこをきっかけに、新たに自分たちで遊びを作りだしていく楽しさや簡単なルールを守って遊びをすすめていく面白さを感じていたと考える。これは、人とかかわりの基礎を育むうえでとても大切な経験であると考えます。

このように、教師が子どもたちのごっこ遊びの様子をしっかりと見取り、遊びを刺激するような材料や環境を工夫することが大切であると考えます。

以上のように研究をすすめる中で、ごっこ遊びとそれを支える教師のかかわりが、子どもたちの人とかかわる力の基礎の育みに大きくつながっていることが分かった。これは、どちらか一方ではなく、ごっこ遊びと教師のかかわりの両面があるからこそ人とかかわる力が育まれるのだと考える。

さらにそこから生まれる子どもたちの学びの視点を教師がしっかりと見取っていくことが大切だと改めて感じた。

この研究からごっこ遊びは子どもたちが発達していく上で極めて必要な遊びの一つであるのではないかと考える。

今後は、さらにごっこ遊びを発達段階別に焦点を当て、改めて子どもの年齢に応じたごっこ遊びを通してより効果的に人とかかわる力を育む教師のかかわりとは何かを探っていきたい。

<引用文献および参考文献>

- 1) 森上史朗等：「個と集団を生かす保育とは」
pp. 9-10, 1997, フレーベル館.
- 2) 片岡輝：「遊びは発達のプロセスにおける通過地点」
<http://www.toyjournal.or.jp/cgi-bin/vote/kataoka3.html>